

中学時代、三村悠紀というクラスメイトがいた。

整った顔立ちと爽やかでボーイッシュな印象を与えるショートカットよりも、着崩した制服や自分で開けたと公言していたピアスの穴や、目尻のメイクが印象に残るような、そんな人だった。よく、授業を抜け出したり、公園でガラが悪い先輩と遊んでいたりする姿を目にしたことがある。

真面目でがり勉、なんて言われてきた私と彼女ではあまりにも違ったし、クラスメイトだからと言って教室で会話することなんてなかったけれど、たった一度だけ、学校の外で彼女と話したことがある。

模試のために市内まで出ていた時に、偶然、コンビニの前で男と別れる彼女に出会ったのだ。相手は高校生くらいの年頃の男の人で、三村さんと軽いキスをしてから、バイクにまたがって去って行った。彼を見送る三村さんの視線があまりにも冷え切っていて、しばらく見つめていたら、私の視線に気が付いた彼女と目が合ったのだ。

「あなた、クラスの人だよな」

少し低めの落ち着いた声は、彼女がいつも同じグループで話している、媚びたような声の女の子とは少し違う印象を与える。私は彼女に名前も覚えられていないことに少し悔しいような気持ちになりながら、うなずいた。

教室で座っている時よりもメイクが濃い。本来の整った顔立ちだけで十分人が寄って来るのに、なんで化粧なんてするんだろう。

ショートカットの毛先が触れている首筋をかきながら、彼女が溜息を吐いた。

「そんなガン見しないでよね」

呆れたように紡がれた彼女の言葉に恥ずかしくなって、適当な質問を投げかけた。

「あの人、彼氏？」

私の唐突な質問にすぐには答えずに、彼女はさっき男を見送った時と同じ冷めた目で私を見つめていた。首筋に手を当てて佇むその姿だけでまるで絵画のように綺麗で、寝癖をごまかすために髪を結ってるだけの私と、同じ人間かどうか疑ってしまうくらいだ。

「優等生でもそんな質問するんだね」

口元だけ歪な笑みを浮かべて、馬鹿にしたような口調だった。それでもさっきより恥ずかしくなくて「彼氏じゃないんだ」と言った。

「別に誰でもよくない？ 関係ないじゃん」

関係ない、という彼女の言葉が正しいことは分かっていた。でもなぜか、教室では強張って動かない唇が、この雑踏の中、彼女の真正面では動くのだ。

「好きな人じゃないのに、あんなことできるんだ」

キス、とすら言う勇氣のなかった私のその言葉に、彼女は一瞬、魂が抜け落ちたみたいな、本当に空っぽな顔になる。

そして小さな溜息を吐くと、静かに言葉を吐いた。そう、まるで、唾を吐き捨てるように。

「あたしはあの人のこと、ちゃんと好きだよ」

優等生チャンには分からないだろうけど。そんな下手な嫌味を残して、彼女はコンビニの中へ

入って行った。

その会話以来、特に話すこともなく。中学を卒業し、私は県内有数の進学校に落ち、県外の私立高校へと進んだ。

もう、彼女達のような人とは一生関わることもないだろう。そう、思っていた。

一年後、彼女と再会することになるとも知らずに。

高校に入って、中学時代、真面目キャラのせいで部活も何もほとんど楽しめなかった過去を取り戻そうと、部活に励んだ。

弱小テニス部はろくに練習もない不真面目な部活だったけど、上下関係もほとんどなくて先輩は優しいし、好きだった。

「一年生の、三村悠紀です。よろしくお願いします」

高校二年生の春、一年生の後輩の一人として入ってきたのは、あの、三村悠紀だった。

初日の部活が終わって、三村さん以外の一年生は固まって帰って行く。それを見送る三村さんに、私は慌てて駆け寄った。

「三村さんだよね？」

肩を掴んで話しかけると、最初で最後のはずだった会話を交わしたあの日の冷たい目とは違う、うさんくさい笑顔を向けられた。

「はい。三村ですよ。どうかしましたか？ 高場先輩」

「そうじゃなくて。第三中学の、三村悠紀でしょ？」

誤魔化して去ろうとした彼女に対して焦りといら立ちをあらわにさせて叫ぶと、彼女は溜息を吐いた。首筋をかくのは、あの頃から変わらない癖なんだろうか。

「あー、もう、最悪」

言葉の割には、そう思っていないさそうな、仕方がない、とでも言いたげな表情で、彼女はベンチに座った。

「先輩もかけてくださいよ。あたしだけ座ってたら変でしょ」

不遜な態度でそう言われて、私は渋々隣に座った。剥げかけの青いベンチには本当にあるかわからないような生乳会社の名前が書かれている。

「あんたも、雰囲気とか変わってたから知らないフリしてくれるかと思ったのに」

ぼやくような口調でそう言われて、知らないふりをした方が良かったのか、と自分の選択を一瞬後悔する。でも多分、今日知らないふりをして、私はいつか、こうして彼女に問いかけていた気がした。

「あの、三村さん」

隣を向くと、眩しい夕陽を真正面から眺める三村さんがいた。爽やかなショートカットと目元に施されたメイクはあの頃から変わっていないのに、髪の毛は少しだけ痛んで、ピアスの穴も塞がっていた。

「一年の途中で高校中退しなきゃいけなくなっって、もう、人生やり直そうと思ったの」

澄んだ彼女のアルトは、何かを抑えるような、堪えるような、そんな声だった。

「でもなんであんたがいるかなあ」

うつむいて頭を抱えられてしまう。私の方が先に入学したんだけど、なんて思いながら、そこ

その進学校であるここによく入学できたな、なんて失礼なことを思った。

「三村さん、頭良かったんだね」

彼女が中学三年間、ろくに勉強していなかったことや、テストの点数が悪かったことを知っている。正直テストの点くらいしか、私が彼女たちに勝るところはなかったから、意識していたんだと思う。そんな私の言葉に三村さんは小さく笑った。

「割とね」

三村さんのそんな、不遜とも取れるかもしれないけれど、堂々とした態度に、何か、憧れにも似た感情を覚えるのが、自分でも分かった。

「こんなとこ、誰も進学してないと思ってたのになあ」

苦笑する彼女の声に「私も」と返事をした。彼女は目を丸くして私を見つめる。

県内でも、県外でも、受験する高校はできるだけ成績のいい、家から遠いところを選んだ。もつと言うなら、絶対に同じ学校から進学希望者がいないような所を選んだ。

「何で、あんたがそんなことに気にすんの？」

不思議そうな彼女を見て、思わず笑ってしまう。

「だって私、クソ真面目でつまんない、から」

中学生の頃、友達から言われていた陰口だ。私のいなくなった隙を見て行われる陰口大会は、今思えばとても馬鹿馬鹿しい内容ばかりなのに、中学の頃の私はそれを無視できなかったし、傷ついた。

ここから早く離れたい。その一心で勉強をして、さらにつまらなくなった私に、誰も構わなくなった頃、やっと卒業を迎えた。中学時代は、ずっと海の中で潜水しているような気分だったことを思い出す。

「ふうん」

自分から聞いた割に興味なさ気にうなずくと、彼女はきちんと磨かれた自分の爪を触り始めた。

「お互い、やり直すために来たんだね」

ベンチから立ち上がりながら、三村悠紀にそう告げると、彼女は小さく笑った。

「悠紀でいいよ。花帆先輩」

自己紹介で言った名前を、覚えてただけなのか。それとも、もしかして、あの後、私を知ってくれたのか。

立ち上がって私に握手を求める悠紀しか、それは知らないことだった。

悠紀は、地元からこっちに家族で越してきたらしい。家族、と言っても悠紀とお母さんのたった二人だけだ。女手一つで悠紀を育てたお母さんの収入だけでは高校にもう一度入ることは厳しかったから、悠紀は死ぬ気で勉強して、奨学金を獲ったらしい。

悠紀の家は学校から徒歩十分かかる駅の裏手にあって、毎日彼女は自転車で通学している。いつしか一緒に帰って、悠紀の自転車の後ろに乗せてもらうのが日課になっていた。

悠紀が本当は高校二年生だということは私以外誰も知らないから、私と悠紀は、とても仲のいい先輩と後輩、という感じだと思う。

「花帆先輩、ちよつと待っててもらっていいですか」

「わかった、部室の前で待ってるね」

約束しているわけではないし別にいいのに、なんて思いながらも、悠紀がわざわざ声をかけて

くれることに、少し嬉しくなる。

小さな優越感を胸に秘めた私に、後輩の中でも一番好奇心旺盛なゆいこが話しかけてきた。

「花帆先輩っ、聞きましたかー？」

浮かれたようなその声に少し戸惑いながらも「何？」とたずねると、ゆいこは口角をこれでもかというくらいに上げて笑った。

「悠紀ちゃん、今っ、男子から呼ばれてるんですよ！ 告られるんですっ」

自分のことでもないのに、きゃーっとはしゃいだような甲高い悲鳴を上げて、ゆいこは飛び跳ねる。

「へ、へえ」

彼女のテンションに気おされながら相槌を打つと、次期部長だろうと言われている同級生の渚が笑った。

「悠紀、美人だもんね！」

確かに悠紀は、誰よりも整った顔をしている。

「どう返事するんですかねっ、花帆先輩！ なんか聞いてないんですかあ？」
はしゃぐ部員達をよそに早々と着替えて、私はすぐさま荷物を肩にかけた。

「何も聞いてないですっ。お疲れ様でした！」

おつかれさまでしたー、と後輩の揃った声を背に部室を出ると、そこにはもう、悠紀が佇んでいた。

「早いね」

告白って、そんなに早く終わるものなのかな。した経験もされた経験もないから分からないけれど、少し驚いてしまう。

「内容は聞いてたんで、断るだけでしたし」

あっさりとしたその言葉に、部室の中で皆がしていた会話が聞こえていたんだと気が付いた。
「なんか、ごめんね」

部室棟の階段を下りて、駐輪場まで歩く途中、そう言った。悠紀は右手で自転車の鍵を回して遊びながら、首を横に振る。

「別に、花帆は何も言っただけだし」

後輩のような接し方をされるより、こうやって呼び捨てで気軽に話してくれる時間の方が、うんと好きだ。

「ありがとう」

悠紀が、小さくうなずいた。

駐輪場に着くと、悠紀は赤い自転車を取り出して、すぐにまたがる。悠紀が「乗って」と言うのを待って、私はその自転車の荷台に乗った。

本当は二人乗りはいけないことだと分かりつつも、いつも止められない。悠紀の言葉には魔力がある。

彼女の細い腰に力を込めて抱き着いて、駅までの坂道を下って行く。

「告白、断ったんだね」

風で彼女の髪がなびいて、首筋が目の前に晒される。小さな黒子が、真っ白な肌の中で浮いていた。

「うん」

顔は見えないけれど、きつと悠紀は小さく笑っているのだろう。苦笑でも、微笑みでもない、口角が上がっているだけの微妙なその笑みが、とても彼女らしくて、私は気に入っている。「何で？」

恋愛というのは私はまだよくわからないけれど、悠紀は中学の頃、告白されては付き合っていたと思う。だからこそあの日は「好きな人じゃないのに、そんなことできるんだ」なんて言葉をついたのだから。

悠紀はハンドルから片手を離して、腰に回った私の手に一瞬だけ、触れた。

「もう、だめなんだ」

「なにが」

悠紀が大きな溜息を吐くのが、背中越しに分かった。腰に回す腕を緩めて距離を取ると、伸びた背筋の向こうに下着の線が透けて見えて、少し恥ずかしくなる。

「あたしはもう、恋愛とかしちゃだめなの」

駅前の交差点の信号が赤色になるのが見えた。悠紀がブレーキをかけると、自転車はキイキイと小うるさい鳴き声を上げる。

坂道の途中、自転車が止まった。

いつもならここで自転車を下りて「送ってくれてありがとう」と言っただけ、駅に入る。でも、今日は、なんだかそうしなくなかった。

地面に足がついているのに、まだ自転車にまたがったまま、悠紀を後ろから抱き締める。

「なんで？」

悠紀は無言のまま、自転車を走らせ始めた。駅の横を通り過ぎて、裏手に入ると、お世辞にも綺麗とは言えないアパートが見える。

「うちの家、ここ」

自転車を停めて、悠紀はそう言った。私は今度こそ自転車から降りる。悠紀が駐輪場に自転車を停めて、鍵をかけるのを待つ。

アパートの階段は、唸り声を上げながら私を迎えてくれた。悠紀がスカートのポケットから取り出した鍵で緑色に塗られたドアを開けて、私を招く。

狭い廊下を通る途中、開け放されたリビングのドアが見える。置きっぱなしのコップに、ソファアーの上に置かれた洗濯物が、生活感を出していた。

悠紀の部屋は、白だけのベッドと、小さな勉強机が置かれているだけだった。窓のカーテンレールに、黄色いティーシャツがかけられていた。

悠紀はベッドの上に会ったピンク色のクッションを床に置いて、そこに座るよう言った。私が大人しくそれに従うと、悠紀はすぐに部屋を出て行く。

何で私がここにいるのか、一番分かっていないのは私だろう。

シンプルというよりは、質素な悠紀の部屋を眺めていると、悠紀が麦茶を持って戻ってくる。水色と黄色のプラスチックに、私達が幼稚園の頃に流行った、かえるのキャラクターが描かれたコップは、あまりにも悠紀には似合わなくて、笑ってしまう。

悠紀は怪訝そうな顔をしながら一口だけ麦茶を飲むとコップを置いて、自分のワイシャツに手をかけた。

薄い水色をしたワイシャツのボタンが外されて、彼女の白い肌があらわになる。

「ちょっと、悠紀、何して」

慌てて彼女に差し出した右手は、彼女の右手に掴まれて、払われた。

「いいから、見ててよ」

ワイシャツを床に落とすと、悠紀は薄いピンクのキャミソール一枚になる。胸の谷間がキャミソールから覗いて、少しどきっとしてしまった。

「多分、誰かに話したかったから」

そう、小さく呟いて、悠紀がキャミソールを脱ぎ捨てる。制服のスカートと、薄い黄色のブラジャー一枚だけを見に着けた彼女は、私に微笑んだ。

「ここ」

さっき払われた私の右手を取って、彼女は自分の下腹部に押し付ける。

他人の、それも友達の子の身体に触れるだなんて、心臓が爆発するんじゃないかと思った。それくらい、彼女に触れることが、私にとって怖かったのだ。

腰なんて折れそうなくらい華奢なのに、胸は脂肪が詰まって膨らんでいる。悠紀の身体が、瘦せて骨の目立つ自分の身体とはあまりにも違って、惨めな気持ちになってしまう。

彼女のお腹の中心はぬくくて、悠紀は少しくすぐったそうに笑った。

「ここに、赤ちゃんがいたの」

彼女の淡い黄色の下着のしたで、透けそうな程白いのに、どこか赤みのさした肌がゆっくりと上下していた。この下に心臓と肺があると、信じられない。

「どういう、こと？」

彼女と目を合わせると、茶色い瞳が私を真っ直ぐに射抜く。

「中三の時、市内であんたに会ったことあったでしょ。あのときの人」

バイクにまたがった男は、私の記憶の中に焼き付けられていた。三村悠紀の好きな人、というネーミングで。

「高校入ってしばらくしてから。二学期の最後くらいかな、できちゃった」

冗談っぽい言葉を選びながら、口調は重い。酸素がなくなってしまったみたいに、息がしづらかった。

同じ高校に入って、近くなったと思っていた。勝手に、そう、考えていた。

でも、彼女と私は、あまりにも違っている。

「おろせて言うの」

まるで、今、言われているかのように、彼女は嘆く。私の手を使って、もう、赤ちゃんのいないお腹を撫でながら。

今でもその言葉が、彼女を、苛んで、蝕んでいるのだろうか。

「嫌、あんたがどう言おうが一人でも産んでやる、て言ったら、お腹、を、殴られて」

妊娠したと言う時期から、明らかに十か月は経っていないのに、彼女のお腹はへこんでいる。高校を中退したこと。引越越してきたこと。恋愛なんてしないと聞いたこと。

「血がいっぱい出て、いなくなった」

彼女のお腹の中にいた赤ちゃんは、その父親に、殺されてしまった。

「あたしが、殺したんだよ」

いつのまにかうつむいてしまっていた顔を上げると、今にも泣き出しそうな表情で、悠紀が震えていた。

私は、膝立ちになって、覆いかぶさるように、彼女を抱き締める。背中を叩いてやると、彼女

は小さな声を上げて、泣き出した。

「全部、やり直そうって思ったのに……まだ、夢に出て来て、何回も、何回も、死んじゃって」えづきながら、苦しみながら、彼女が吐き出す言葉は、ただただ痛い現実だった。

お風呂の鏡に映る、貧相で骨ばかりの自分の身体とはあまりにも違う。女性的で、中に脂肪の詰まった彼女の身体は、ぬるい。

「あまりにも、違うんだね」

私が彼女にそうささやくと、彼女は、小さな子供のように、泣き声を上げた。

赤ちゃんのような、獣のような、その声に耳を澄ませながら、私はひたすら彼女の背中を撫でる。

何が、お互いにやり直すために、だ。

私と彼女は、こんなにも、痛みの重さが、違うのに。

彼女を強く強く抱きしめて、しばらく経つと、悠紀は泣き疲れて眠ってしまった。悠紀をベッドに寝かして、私はベッドの縁に座る。親に携帯からメールを入れて、電源を切った。

眠っている悠紀の綺麗な身体を眺めながら、自分のシャツのボタンを外した。悠紀と同じように床にシャツを落としてから自分の身体を見つめると、あばらが浮いている。

体温の低い身体に、悠紀の手を触れさせた。

私達は、あまりにも違う。

だから私は、彼女に焦がれるのだろうか。

「大好き」

囁いて、悠紀の隣に潜り込んだ。

この、私の大好きな女の子が、今日だけでも、悪い夢を見ませんように。

悠紀を抱き締めて眠りにつきながら、そう、祈っていた。

「花帆。起きて」

控えめな声に呼ばれて目を開けると、目の前に悠紀の整った顔が見えた。昨日泣いても落ちなかったメイクは落とされて、いつもより顔つきが少し幼く見える。

「気づいたら寝てたから、びっくりした」

溜息を吐く悠紀をよそに時計を見ると、まだ午前五時半だった。

「何でこんなに早いのか？」

「勝手に友達泊めたってばれたら、母さん、うるさいから」

ときばきと出て行く用意をしながら、昨日のことがなかったみたいに振る舞う悠紀に、少しだけ、腹が立ってしまう。

「シャワー浴びるでしょ？ 今、使っているよ」

あたしもさつき使ったし、と彼女が言うと同時に、私は後ろから彼女に跳び付いて、抱き締めた。

「大好きよ」

私達は、同じにはなれない。だからきつと、理解もしてあげられない。その苦しみは、悠紀にだけしか、解らない。

でも、それでいい。

私は、何もできないけれど、きつと、これでいい。

「花帆」

「何？ 悠紀」

震えた悠紀の声に気付かないふりをして、笑いかけた。

「シャワー、早く浴びてきて」

お風呂場を指差す悠紀に従って部屋を出ようとしたところで、小さな「ありがとう」が聞こえる。

廊下から見えるカーテンの隙間から、朝の光がこぼれていた。